幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの実践研究１
－Ａ公立幼稚園における園内研修を手掛かりとして－

Practical Study of Curriculum Management in Early Childhood Education 1
－A case study of teacher's training in A kindergarten－

岡野　聡子
Satoko Okano

キーワード：幼児教育、カリキュラム・マネジメント、PDCAサイクル

Ⅰ．はじめに

本稿は、筆者が平成29年４月から平成30年１月まで、「幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの適切な運営に向けて」をテーマとし、Ａ公立幼稚園にて行った園内研修での取り組みの内容とその成果を提示することを目的としている。

平成29年３月31日に新学習指導要領が公示され、平成30年４月１日から順次施行となる中で、最も早く施行されるのが新幼稚園教育要領である。[1] 今回の新学習指導要領では、予測不可能な未来社会において自律的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力とは何かを社会と共有・連携する「社会に開かれた教育課程」が重視され、新幼稚園教育要領においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や資質・能力の三つの柱が明示された。また、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をふまえ、教育課程の編成・実施・評価・改善を図り、教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」を推進することも掲げられた。カリキュラム・マネジメントとは、「学校の教育目標を実現化するために、教育活動（カリキュラム）と条件整備活動との対応関係を、組織文化を媒介として、PDCAサイクルによって組織化・戦略的に動態化させる営み」（田村；2006）である。

幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの研究を概観すると、次のものがある。鈴木ら（2016）は、カリキュラム・マネジメントの評価を明らかにすることを目的とし、平成27年度幼稚園教育理解推進事業都道府県研究協議会研究報告要旨に掲載されているカリキュラム・マネジメントの適切な実施についての全国47都道府県の報告を資料として、指導計画作成と評価・反省における工夫と課題の抽出・分析をしている。また、上村（2017）は、教育課程・保育課程・教育及び保育に関する全体的な計画などの幼児教育・保育の根幹を担うグランドデザインに着目し、編成プロセスの構造と編成・活用上の現実的課題を明らかにしながら、現場におけるカリキュラムデザインの在り方について検討し、カリキュラム・マネジメントを重視しながら各保育者が自律的に編成プロセスに参画する重要性を示唆している。朴

---

(1) 新幼稚園教育要領は平成30年４月１日から、改正省令及び新小学校学習指導要領は平成32年４月１日から、新中学校学習指導要領は平成33年４月１日から施行される。（文部科学省（2017）「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定並びに幼稚園教育要領の全部を改正する告示、小学校学習指導要領の全部を改正する告示及び中学校学習指導要領の全部を改正する告示等の公示について（通知）」）

（2017）は、幼稚園の園内研修から、協働によるよりよい幼児教育を目指したカリキュラム・マネジメントの実践を試み、教育課程（年間指導計画）が日々の保育活動や子どもの姿にどのように結び付いているか振り返り、保育実践力の向上を試みている。また、横山は、アクション・リサーチによる園の教育目標の明確化の研究（横山；2016）やカリキュラム・マネジメントの先行研究を踏まえ、各幼稚園現場で本格的なカリキュラム・マネジメントを成立させるための研究者の協働手順の構想（横山；2017）を提示している。幼児期におけるカリキュラム・マネジメントに関する研究は、鈴木ら（2016）や横山（2017）が指摘しているように、その進め方を巡る課題や工夫を取り上げた研究は少なく、現場では、具体的に何から着手し、どのように進めていけばよいかといった問題が常につきまとうと述べられている。

教育活動の質の向上を図る装置としての「カリキュラム・マネジメント」は、幼児教育に携わる者にはあまり馴染みのない用語であるが、すでに教育課程の編成・実施・評価・改善は現場で行われており、全く新しい概念が導入されたわけではないといえるだろう。しかし、なぜ、「カリキュラム・マネジメント」かといえば、横松（2017）が取り上げるように、「本格的なカリキュラム・マネジメントを成立させるためには、各幼稚園において、国の教育課程基準の実現と園の特色のあるカリキュラム創りを両立させようとする思考の仕方と、自園の保育全体を保育方法の一つの理論体系ととらえて実践し発展させるという思考の仕方が必要になる」こと、「子どもの実態に応じてカリキュラムを編成し直していくという、動態的プロセスが重要であり、さらに園運営に関し、家庭や地域との連携をマネジメントしていくという広範囲な視野が求められる」からである。つまり、国の教育課程基準の実現と園の特色あるカリキュラム創りの両立、自園のカリキュラムをPDCAサイクルとして動態的に運営していくこと、さらに、家庭・地域・園の連携といった「広範囲な視野」として園全体のグランドデザインの構築を全教職員の協働によって図り、子どもの保育・教育の質の保障を実現するための取り組みが求められているといえる。

現在、子どもの体力・運動能力の低下や核家族化によって異世代が地域でふれあう機会が少なくなったこと、共働き家庭の増加による預かり保育のニーズの増加、子育て支援、保幼小連携の推進、特別支援教育等、幼児教育をめぐっては、さまざまな課題や社会的期待がある。そうした多様な課題や社会的期待に取り組むために、PDCAサイクルというマネジメントの視点を取り入れ、より良い保育・教育活動を追求し続けることが重要であるといえる。

Ⅱ．幼児期におけるカリキュラム・マネジメントとは～新幼稚園教育要領をふまえて～

中央教育審議会答申（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」にて、「幼稚園等では、教科書のような主たる教材を用いず環境を通して行う教育を基本としていること、家庭との関係において緊密度が他校種と比べて高いこと、預かり保育や子育ての支援などの教育課程以外の活動が、多くの幼稚園等で実施されていることなどから、カリキュラム・マネジメントは極めて重要である」とし、幼稚園等においては、次の3つの側面からカリキュラム・マネジメントを捉える必要があるとされた。

①各領域のねらいを相互に関連させ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や小学校の学びを念頭に置きながら、幼児の調和の取れた発達を目指し、幼稚園等の教育目標等を踏まえた総合的な視点で、その目標の達成のために必要な具体的なねらいや内容を組織すること。

②教育内容の質の向上に向けて、幼児の姿や就学後の状況、家庭や地域の現状等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。

③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、家庭や地域の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

①の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は10項目あり、小学校の学びを念頭に置きながら、既存の５領域の内容項目から抽出されたものである。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（文部科学省（2017）幼稚園教育要領、pp. ４－５より抜粋）

（１）健康な心と体：幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
（２）自立心：身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
（３）協同性：友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
（４）道徳性・規範意識の芽生え：友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
（５）社会生活との関わり：家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
（６）思考力の芽生え：身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。
（７）自然との関わり・生命尊重：自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。
（８）数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚：遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。
（９）言葉による伝え合い：先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
（10）豊かな感性と表現：心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを　味わい、意欲をもつようになる。

また、今回の改訂では、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の学びの連続性を踏まえ、資質・能力の三つの柱が示されている。幼児教育では、知識・技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎、学びに向かう力・人間性等の３つである。知識・技能の基礎とは、「遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができるようになるのか」、思考力・判断力・表現力等の基礎は、「遊びや生活の中で、気付いたこと、できるようになったことなども使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか」、学びに向かう力・人間性等は、「心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか」である。新幼稚園教育要領では、これらの資質・能力の三つの柱を踏まえ、遊びを通して総合的に指導することとされている。さらに、「主体的・対話的で深い学び」として、アクティブ・ラーニングの視点が取り入れられている。以下は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、幼児教育にて育みたい資質・能力の三つの柱の要素、主体的・対話的で深い学びのアクティブ・ラーニングの要素を筆者が構造化したものである。

表１　幼児期における資質・能力３つの柱の要素とアクティブ・ラーニングの要素の構造化

幼稚園等では、①②③の３つの側面からカリキュラム・マネジメントを捉える必要があることをふまえ、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」や幼児教育にて育みたい資質・能力の三つの柱、教師の援助として、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点が求められているといえる。

Ⅲ．園内研修での取り組みと成果

（１）A公立幼稚園の概要

A公立幼稚園（以下、A園）の園児総数は69名、３歳児が２クラス編成、４歳児・５歳児が１クラス編成となっている。A園は公立小学校の附属幼稚園であり、保幼小連携の取り組みや食育活動に力を入れていることが特徴である。小学校の敷地内に幼稚園があるため、小学校の広大な芝生のグランドを自由に使用することができ、子ども達が元気よくかけっこを楽しむ姿や虫取りを夢中でしている姿が見られる。また、小学校の給食にて使用しない食材の部分（白菜やキャベツの外側の葉っぱ、オレンジの皮、等）をもらい、自由遊びのおままごとの際に使用できるようにしている。本物の食材を扱うことで、葉っぱや果物の香り、硬さや柔らかさといった手触りを実感し、食への関心をもたせる工夫をしている。カリキュラム・マネジメントについては、平成26年からA園が所属している幼稚園教育研究会の研究主題として掲げられ、各園の保育実践の振返りや情報共有を行ってきた。しかし、カリキュラム・マネジメントとは何かを現場レベルで共有することが難しく、戸惑いもあり、どこから何に着手すればよいかがわからないという意見も多数あったようだ。A園においては、平成29年４月の時点にて、ひとまず、保育実践の振返りから日々の保育を見直すこと、子ども達のエピソード記録をできる限りとり、指導計画に反映させていこうとしていた。また、園長からは、園全体の運営を点検し、園の特色や取り組むべき課題について考えたいという要望もあり、園内資料の収集を通して園の現状把握を行うこととした。

（２）園内研修の実施内容および収集した資料について

園内研修は、平成29年４月から平成30年１月まで全10回実施した。実施した日および実施内容は、表２である。収集した資料は、園の教育課程、指導計画（日案・週案・期間案）、教育実践記録（子どもの様子の記録）、保幼小連携の実施計画、特別支援の指導計画・個別記録、預かり保育の実施計画、子育て支援の実施計画、園内・園外研修の実施計画、学校評価、園だより・クラスだより、研究協議会資料である。

表２　園内研修の実施内容および資料収集の過程

回	日	園内研修の内容および収集した資料
1	4/28（金）	・これからの幼児教育に求められること、保育の質とは何かを考える ・保育教育実践における評価スケールの紹介
2	5/15（月）	・教育実践の振返り・評価、日案・週案の検討（特に環境構成について） ・園内の環境構成の検討・改善点の抽出 ・幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの３つの側面について 資料収集　幼稚園要覧、教育課程、今年度の指導計画（日案・週案・期間案）
3	5/29（月）	・教育実践の振返り・評価、日案・週案の検討（特に教師の援助について） ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿10項目、資質・能力の三つの柱の捉え方を日々の教育実践をもとにして検討する 資料収集　これまでの研究協議会資料、園内・園外研修の資料
4	9/11（月）	・教育実践の振返り・評価、日案・週案の検討（特に指導計画について） ・園の教育目標と育てたい子ども像の検討（園だよりから子どもの実態を探る） ・既存の日案・週案・期間案の様式の見直し・構造化を検討 ・教育課程の検討（年齢別教育目標の設置、食育の項目を追加） 資料収集　今年度の園だより、日々の記録、学校評価・第三者評価の資料
5	10/11（水）	・教育実践の振返り・評価、日案・週案の検討（特に指導計画について） ・新指導計画フォーマットを用い、日案・週案のねらい・内容の具体化を図る ・絵本室の環境整備

回	日	園内研修の内容および収集した資料
6	10/16（月）	・日々の記録の取り方、エピソード記録の書き方と様式の検討 ・異年齢児交流における課題抽出・改善点の検討 資料収集　保幼小連携の年間計画、預かり保育の年間計画、子育て支援の実施計画
7	10/25（水）	・子どもの活動を撮影し、教育実践を振返る・評価、日案・週案の検討 ・異年齢児交流における課題抽出・改善点の検討 ・園庭マップの作成（季節ごとの栽培植物や子どものしている遊びをまとめる） 資料収集　エピソード記録、映像記録（ビデオ、写真）
8	11/１（水）	・教育実践の振返り・評価、日案・週案の検討 ・異年齢児交流の振返り・評価 ・日々の記録の取り方、エピソード記録の書き方・様式の検討・改善 資料収集　新指導計画の様式で書かれた日案・週案
9	11/22（水）	・公開保育、教師の援助を資質・能力の三つの柱の視点から捉える ・カリキュラム・マネジメント実施過程の解説
10	１/15（月）	・これまでのカリキュラム・マネジメントの取り組みの振返り ・園の教育目標と育てたい子ども像の再検討 ・今後の園内研修で取り入れたい内容の検討

（３）園内研修での取り組みと成果

①園の教育目標の明確化

教育課程の編成・実施にあたっては、園の教育目標である育成したい子ども像が軸になるといえる。Ａ園の教育目標は、きらきらした子ども（健康で元気いっぱい何事にも取り組み勇気をもって行動する）、ほのぼのした子ども（思いやりのある、やさしくあたたかい心をもつ）、はきはきした子ども（感じたこと、考えた事を話し、人の話を聞くことができる）の３つが掲げられている。Ａ園の場合、10年ほど前に園の教育目標の検討が行われて以降、人事異動もあり、現在ではこの３つの教育目標がどのような思いや経緯があって設置されたかを知る者はいない。今回、横山（2015）の論文を手掛かりとして、育成したい子ども像および園の教育目標の検討を行った。まず、園だよりや保育記録、日案・週案から子どもの姿や課題を取り出し、育成したい子ども像を話し合った。その結果、既存の3つの教育目標を活かし、年齢別の教育目標を設定することとし、平成29年度における年齢別の年間目標を設定した。また、指導計画を立てる際にも、園の教育目標を常に意識できるようにするため、健康な心と体の育成、人・環境とかかわる力の育成、思考力・伝達力・表現力の育成と項目立てをし、その項目に沿って、ねらい・内容を組織できるようにした。

表３　年齢別の教育目標

教育目標	年齢別の教育目標	項目
きらきらした子ども	３歳児：基本的生活習慣を身に付け、自分でしようとする ４歳児：社会生活の中で、必要な態度や習慣を身に付ける ５歳児：自己を十分に発揮し、園生活の楽しさを味わう	健康な心と体の育成
ほのぼのした子ども	３歳児：教師や友達と遊んだり、話したりすることを喜び、一緒に活動をしようとする ４歳児：明るくのびのびと行動し、充実感を味わう ５歳児：友達と一緒に様々な環境にかかわり、おもしろさを感じる	人・環境とかかわる力の育成
はきはきした子ども	３歳児：思ったことや感じたことを自分なりの言葉や動作で表現する ４歳児：感じたことや考えたことを他者に伝えることを楽しむ ５歳児：新しく体験したことを生活の中に進んで取り入れようとする	思考力・伝達力・表現力の育成
平成29年度　年齢別の年間目標		
３歳児：教師と共に園生活を楽しみ、基本的な生活習慣を身につける ４歳児：友達と一緒に様々なものごとに意欲的に取り組む中で、自分の思いや考えを伝え合う ５歳児：友達との関わりを大切にし、就学に向けた必要な態度を身につける		

また、平成28年度の学校評価において、「友達と一緒にいろいろな遊びを楽しむ姿は見られるが、クラスごとの遊

びが多く他のクラスとの交流が少なかった。異年齢児の交流を深めより一層刺激し合える場を設定していきたい」という課題が提示されたため、平成29年度から異年齢児交流をスタートさせたものの、理想とする異年齢児交流の形が抽象的であり、話し合いが充分に持たれていなかったことも明らかとなった。そのため、これまでの実践記録を基にして理想とする異年齢児交流の姿を話し合い、園が掲げる重点項目として「異年齢児交流を深める」を設置し、年齢別の教育目標も整理した。

平成29年度　園が掲げる重点項目【異年齢児交流を深める】・年齢別の教育目標

３歳児：友達と関わり、刺激を受けながらいろいろな遊びに興味や関心をもつ ４歳児：異年齢の子どもに関心を持ち、自分から関わりを広める ５歳児：友達とかかわる中で思いやりの気持ち、いたわりの心をもつ 　　共通の目的を持ち、達成に向けて考えたり協力したりして人とのかかわりを大切にする

②指導計画書の検討・改善

A園では、年度の終わりに次年度の期間案を作成し、日案・週案は、園内研修を実施する際に作成している。日案・週案・期間案を検討し、課題を取り出したところ、次の７項目が取り上げられた。①指導計画を立てる際、園の教育目標は全く意識されていなかったこと、②日案・週案にて、幼児の姿が具体的に書かれておらず、イメージがしにくいこと（例：「自分のしたい遊びを楽しんでいる」どんな遊びを楽しんでいるのか？）、③幼児の姿がねらいに反映されていない部分があること（例：幼児の姿として「虫取りを夢中で楽しむ姿がある」等の具体的記述があっても、運動会等の園にとって大きな行事がある週では、ねらい・内容が行事中心の記述のみとなっている）、④掲げたねらいに対応する内容項目が見当たらない箇所があること、⑤ねらいと内容が具体的でない箇所があること、⑥幼児の姿から用意されるであろう環境構成が抜けていること（例：栽培している植物に関心を示す幼児の様子が記述されているが、その幼児の関心を高めるための環境構成に関する記述がない）、⑦教師の援助において、どのような心情・意欲・態度を育てたいのかという援助の観点が不明確であったことである。これらの課題を踏まえ、指導計画書のフォーマットの見直しも行った。

指導計画書の検討と具体的な改善点

①指導計画を立てる際、園の教育目標は意識されていなかったこと →園の教育目標を検討した際に設定した「健康な心と体の育成」、「人・環境とかかわる力の育成」、「思考力・伝達力・表現力の育成」をねらいと内容に反映させた。 ②日案・週案にて、幼児の姿が具体的に書かれておらず、イメージがしにくいこと →週案にて、「幼児の姿と教師の願い」が同じ項目であったため、「幼児の姿」と「教師の願い」を書き分け、「幼児の姿」の項目に、子どもの様子を具体的に記述することにした。 ③幼児の姿がねらいに反映されていない部分があること →「健康な心と体の育成」、「人・環境とかかわる力の育成」、「思考力・伝達力・表現力の育成」の観点を念頭に置きながら、幼児の姿を今ある姿を記述し、ねらいに反映させることにした。 ④掲げたねらいに対応する内容項目が見当たらない箇所があること →「健康な心と体の育成」、「人・環境とかかわる力の育成」、「思考力・伝達力・表現力の育成」の項目立てをし、その中で、ねらいと内容を組織することで記述の抜け落ちを防ぐこととした。 ⑤ねらいと内容が具体的でない箇所があること →幼児の姿を具体的に記述することで、ねらいと内容の具体化を図ることとした。 ⑥幼児の姿から用意されるであろう環境構成が抜けていること →幼児の姿を意識し、環境構成を記述することとした。また、指導計画において、「環境構成および教師の援助」が同項目内に記述されていたので、環境構成に「◇」を、教師の援助に「◆」として整理した。 ⑦教師の援助において、どのような心情・意欲・態度を育てたいのかという援助の観点が不明確であったこと →知識・技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎、学びに向かう力・人間性等の資質・能力の３つの柱を参考にして、教師の援助の観点を明確にした。

旧）日案

日案

平成○年○月○日（○）　○○組　指導案		
ねらい		
内容		
時間	予想される幼児の活動	環境の構成及び教師の援助
評価		

新）日案

日案（○歳児、○○組、担任：○○○○）
年間目標：

	指導案　平成　年　月　日（　）　○○組　○歳児　欠席児：	
☆ねらいと○内容	健康な心身	☆ ○ ○ ○
	人・環境と関わる力	☆ ○ ○ ○
	思考力 伝達力 表現力	☆ ○ ○ ○

園の教育目標を反映

時間	予想される幼児の活動	◇環境構成・◆教師の援助・□特別支援	エピソード・振返り
気付いた点 改善点 配慮事項			

旧）週案

週案

○歳児　○○組　男児○名　女児○名　計○名　週案　担任○○○○	
平成○年○月○日（○）～平成○年○月○日（○）	
幼児の姿と教師の願い	
ねらい	
内容	
環境の構成と教師の援助	
行事	

新）週案

週案（○歳児、○○組、男児○名、女児○名、担任：○○○○）
年間目標：

	平成　年　月　日　～　平成　年　月　日	
幼児の姿	・ ・ ・ ・ ・	
	教師の願い 課題	・ ・ ・
☆ねらいと○内容	健康な心身	☆ ○ ○ ○
	人・環境と関わる力	☆ ○ ○ ○
	思考力 伝達力 表現力	☆ ○ ○ ○
◇環境構成		◇ ◇ ◇ ◇ ◇
◆教師の援助 援助の視点 知・思・学		◆（知） ◆（知） ◆（思） ◆（思） ◆（学） ◆（学）
家庭・地域 幼小連携		家庭： 家庭： 地域： 地域： 幼小： 幼小：
特別支援		・ ・ ・ ・ ・
行事		
行事（月１回）		

旧）期間案

期間案

○歳児　○○組　○期　（平成○年○月○日～平成○年○月○日）	
幼児の姿	◎
ねらい	☆
内容	○
環境構成	援助
行事	

新）期間案

見本【平成２９年度】　歳児　年間指導計画（Ⅰ期～○期）フォーマット

年間目標：

期	期：　月　日～　月　日 Ⅰ期のねらい：
幼児の姿	・ ・ ・ ・ ・ ・
教師の願い 課題	・ ・ ・
☆ねらいと○内容 健康な心身	☆ ○ ○ ○
人・環境と関わる力	☆ ○ ○ ○
思考力 伝達力 表現力	☆ ○ ○ ○
◇環境構成	◇ ◇ ◇ ◇
◆教師の援助 援助の視点 知・思・学	◆（知） ◆（知） ◆（思） ◆（思） ◆（学） ◆（学）
家庭・地域 幼小連携	家庭： 家庭： 地域： 地域： 幼小： 幼小：
特別支援	・ ・ ・ ・ ・
行事	
行事（月１回）	身体測定、避難訓練、誕生会、力健体育あそび、保育参観

週案では、家庭連携・地域連携・保幼小連携の活動内容、特別支援児への配慮事項、行事の項目を立て、広い視野で保育・教育活動を意識できるように工夫した。また、指導計画を書く留意点として、「１行で端的に書くこと」とした。これは、綿密な計画書を立てることよりも、実施した保育・教育実践の振返りや日々の記録を書く事に限られた時間をあてる方が有効であると考えた結果である。また、日案・週案・期間案の裏面に同じ様式をコピーし、振返りおよび保育・教育活動の改善点を記述することにした。

③保育・教育実践の記録の検討・改善

より良い教育活動を行うには、記録を書き、その記録を振り返ることが大変重要となる。Ａ園では、日々の記録として、Ａ４・１枚に１週間分を記入しており、エピソード記録は、園内研修が実施される時に記述している。エピソード記録について、事実と解釈の切り分けといった書き方が難しいという担任教諭からの声もあり、エピソード記録のフォーマットの作成も検討した。

エピソード記録では、幼児の姿を上段に記述し、中央に写真を２枚添付した。また、幼児の活動から、子ども達がその活動から何を学び得たのかを考察し、下段に記述するようにした。考察では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目の観点を参考にし、学びの要素として位置付けた。最後に、教師の援助の項目を設け、幼児の活動をさらに充実させるために必要となる環境構成等の配慮事項を記述することにした。また、記述することに慣れるためにも、月2回以上、本フォーマットを活用してエピソード記録を書き、教員間で共有することにした。

以上、①園の教育目標の明確化、②指導計画書の検討、③保育・教育実践の記録について、その取り組みを述べた。他にも、園内・園庭・地域環境の把握、保幼小連携、特別支援、預かり保育、子育て支援、家庭・地域連携、学校評価の共有と活用、教職員研修の内容および実施後の情報共有についての検討事項が取り上げられ、今後の課題となった。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目の視点から、子どもの活動を考察する

教師の援助では、子どもの活動を振返り、活動をさらに充実させるために必要となる環境構成等の配慮事項を記述する

エピソード記録　記入例

平成　29年　11月　9日（金）　　異年齢児

場所：遊戯室、階段

園児名：3,4,5歳児

異年齢児で、4グループにわかれ、どんぐり転がしゲームを行った。まず、段ボールや木の板を土台にして、いろいろな廃材（空き箱・トイレットペーパーの芯・ヤクルトの容器・画用紙・おりがみなど）を利用し、子ども達は、どんぐりが通る道を迷路のように作っていった。接着には、セロテープ、色テープ、ガムテープを使用していた。土台に付けていく時、年長児がテープを切ってあげて年少児に渡している姿が見られ、年少児が難しそうにしている時は、「ここにテープをはろう」と話しかけ、手助けをしていた。接着に苦労している姿が印象的であった。

各グループにおいて、いろいろな形のどんぐり転がしゲームの土台が出来上がり、さっそく遊びが始まった。どんぐりの大きさによって早く転がることや、大きなどんぐりの場合、作った道に詰まってしまい、通らない場面もみられた。午後からは、違ったどんぐり転がし作りが階段でスタートした。　長い筒やペットボトルをつなげたりして、2階から1階へと長いどんぐり転がしが完成した。転がすたびに接着が取れたり、どんぐりが詰まるなどの場面も見られたが、ペットボトルの所では転がっていく様子が見えるので「はや～い！」と歓声をあげて喜んでいた。

考察・学びの要素

協同性	どんぐりが通る道を接着している際、上手くいかない場面が見られた。5歳児同士の場合、イメージを共有して創作することができるが、年少児とのイメージの共有は難しい。その時も、年長児は年少児に対し、優しく声を掛け、テープを貼る際にも見守り、共に作りあげる過程を楽しむことができていた。自分の世界で集中して取り組みたい年長児が、ペアの年少児の姿を気に掛ける様子を見て、内面的な成長を感じた。
道徳性	以前、3，4歳児は、5歳児に声を掛けてもらっても、うなずくことしかできなかったけれども、今回は、声を掛けてもらって「ありがとう」と言葉を発することができていた。信頼や親しみが深くなったと感じた。
思考力の芽生え	年長児がペットボトルを切って、土台作りを新たにはじめている姿を見て、3，4歳児もペットボトルに興味を持ち出し、自分から土台作りを始めた。5歳児の行動が、年少児に考え方の幅を広げたように思う。
言葉による伝え合い	筒をつないでいく際、5歳児は3歳児にセロテープを貼る場所を指で示していた。3歳児が貼り終えた後も「取れないようにセロテープ、もっと貼ろう」と話しかけ、3歳児は、その言葉がけに応じて取り組んでいた。その際、3歳児自らが5歳児に「これでいいの？」と声を掛け、見てもらっていた。対話を通して人間関係が作られていく様子であったと思う。

教師の援助について

異年齢児で遊ぶ中で、一緒の目的をもって作り上げる、遊びが発展していくので、個々の姿を把握し無理はないか、負担ではないかを見ていくことを大切にしたい。また、木の板を使っていたグループでは接着に困っていたので、魔法のピン（割りピン）を使用することを知らせ一緒につけてみた。落ちないので安心したようで、いろいろな教材をすぐに用意できる配慮が必要である。

④カリキュラム・マネジメントに取り組んだ感想

今回、カリキュラム・マネジメントに取り組んだ担任教諭、副園長、園長の感想は、以下である。

	感想
３歳児担任	以前から、私達はカリキュラム・マネジメントについて、どのようにしたらよいのか、何をしたらよいのかと迷ったり悩んでいました。保育中の記録・振り返りとして写真を撮ったり、遊びの後の振り返りや話し合いを工夫・改善してみたり、教師間で子どもの様子の報告をしあったり、記録をとったりしてきました。しかし、指導案の書き方、様式を変えよう、変えたら分かりやすいのでは？とまではなりませんでした。 期間案、週案の様式や内容を改善して頂き、足りていない項目・内容は何かが分かりやすくなり、もう一度自分自身の保育活動や活動のねらいを見直すことができました。目の前の子ども達の様子ばかり見て、期間案の振り返りや毎期ごとの見直しができていないことが現状でしたが、指導計画の用紙の裏に気付きや改善点を書くと見直しがしやすいという方法も勉強になりました。資料作成やカリキュラム・マネジメントの過程に参加できたことで、「今」だけでなく「これから」に対応できること、一括化で見やすいことの大切さも知りました。また、今まで「３歳児だから○○は難しいかな」と思うこともありましたが、偏った見方をしてはいけないこと、どうしたら資質・能力の三つの柱を育めるだろうかと考えられる視点、そうしたことを意識しながら保育実践を進められるようになりました。
３歳児担任	今回の取り組みの中で、日々の振り返りの重要性を再確認した。すべての書類をまとめていく中で、園の教育目標から日案までを振り返る機会がどれだけ今までの自分にはあったのだろうかと考えさせられた。また自分の思いやしていることを説明するためにも、要点をまとめ具体的に文章で残すことの大切さや、誰が見ても分かりやすいものにすること、翌年に反映できるような記録の残し方など教えて頂き、とても勉強になった。今回作成した資料を大切にし、引き続き記録を取り生かしていきたいと思う。今まで5領域を考えながら指導案を立て保育していたが、今回、三つの資質・能力を考えたときに自分の指導案には「思考力・判断力・表現力等の基礎」の部分が極めて少ないことに気づいた。今年から幼稚園に来た私にとって、子どもたちが自ら考えたり、工夫できるような環境作りや援助が難しいと感じていたし、どうしていけばいいのか自分自身の日々の課題でもあった。指導計画を立てる上でその部分をどう取り入れていくかを意識するようになり、今後も子どもたちの実態を把握しながら、よりよい環境を作れるよう日々努力していきたい。

	感想
４歳児担任	今回の研究会で「カリキュラム・マネジメント」という課題で、どうしたらいいのか不安だらけでした。先生に何度も足を運んでいただき、毎回話をしていただき、教えてもらっているにもかかわらず、「なるほど」と思いながらも、いざ一人で指導計画や記録を書いてみようとすると悩むことが多くありました。ねらい・内容の書き方もなんとなく「今までこうだから」と思ってるところがあり、今回、先生が「保育をしてない誰が見ても解る書き方を」とおしゃってくださり、要点を具体的にまとめることの大切さを学びました。当たり前に思っていることをもう一度見直すことの大切さも知りました。しかし、改めて書こうとすると、正直、本当に大変でした。先生に教えていただいた、ねらいと内容があっているのか、ねらいを達成するための内容が書かれているのかと見直すと、「あれ？」と疑問に思う部分がたくさんありました。それを考えるようになると、日案や週案だけでなく、期間案、園だよりも見直す必要があり、全部がつながっているということを忘れていたことに気づかされました。また、ＰＤＣＡサイクルの重要性について改めて感じました。計画を立て、実践はしてるものの、振り返りや改善について、きちんと資料として残せていなかったこと、あやふやにしていたなと反省しました。エピソード記録の書き方も、本をしっかりと読み、何度も書くことで身に付けたいです。
副園長 ５歳児担任	今まで決まった様式の中で指導案を書いていて、「これがあたりまえ」という思いで続けてきました。しかし、具体的により細かく記入する事で、子どもの姿が見えてくることがよくわかりました。特にＰＤＣＡサイクルを意識し、日々の振り返りや改善をしていくことの重要性を改めて感じました。遊びを通した指導という点では、環境を整えることで遊びが広がっていくことだと思います。当たり前過ぎて記述していないことが沢山ありましたが、記述する事で、次へとつなげていけるという意味では大切だと思いました。短期間での指導計画の見直しはすごく大変でしたが、気がつかなかった点を指導して頂いて改善していくことで、改めて発見することも沢山ありました。三つの柱に沿った保育内容を組み入れながら、うまく就学に繋げて行けるよう工夫していきたいと思います。私自身の課題として、エピソード記録のとり方、子どもの実態や改善点を次の保育に活していくことが不十分なので、数多く取り入れながら、慣れていきたいと思います。また、今回、異年齢児交流を中心とした活動をする事で、「何が必要か？」や「子ども達の反応は？」など職員で話し合って遊びを進められたのは良かったと思います。また、毎回改善点を見つけられたことは、今後の保育につながる一歩だと思います。クラス担任としてまた、副園長としてもう一度自分の保育を見直していきたいと思います。
園長	教育要領改訂が告示され、どのように取り組んで行けば良いか道筋がわからず、今まで迷ってばかりしていました。カリキュラム・マネジメントに取り組みながら、ＣＰＤＣＡのサイクルになるのかも…とも思いました。また、園の経営において、一番大切な園の教育目標が、改めて深い意味をもつことを実感しました。幼稚園の特色を生かし、園の教育目標を達成するために、全職員参加で教師一人一人の良さを互いに認め合い、協力し合って、子どもの遊びを語り合えることができる関係性を作り出していくことが大切だと改めて感じました。年間カリキュラム・指導案・日案の様式では、エピソードや子どもの姿が書きやすくなり、週案では裏に振り返りを書くことで、より見やすい様式をご指導していただきました。詳しくまとめて書き入れ、具体的に文章化していく力が必要だと痛感しました。書き慣れていくため、12月から週案の様式を変えることにしました。また、日案では月に１回様式を変えて記入することにしました。今回の深い学びにおいて、下記のことについて職員で共有しながら改善・実施に努めていきたいと考えています。①三本柱を重視し、子どもの実態に合ったＰＤＣＡサイクルを確立する、②子どもの遊びのエピソードや、振り返りの記録を取って分析し、次回の保育に生かす、③期間案を新しい様式で記入し、日案を月に１回（指定日）に記入し、書き慣れる、④子どもの遊びの姿を観察し、幼児期に育む10項目の学びを育む、⑤小学校、保護者、地域に、幼稚園のカリキュラムを発信する、⑥他の公立幼稚園でも、共通の取り組みを実施していくです。これからが新しいスタートです。園長のリーダーシップのもとで教師の意識を高め、改訂の内容への理解を深めつつ、幼稚園運営を見直したいと思います。

感想では、担任教諭から、カリキュラム・マネジメントにどのように取り組めばよいかわからず、不安であったという意見があり、指導計画やエピソード記録の様式を変更することで、記述する内容が明確になったこと、また、保育活動の振り返りの大切さに改めて気付いたと述べられた。園長からは、カリキュラム・マネジメントに取り組んだことで、今後の園の取り組みとして５つの目標が提示され、園全体のグランドデザインを考える手立てになったということが述べられた。

Ⅳ．おわりに

幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの実施に際し、先行研究（田村；2003・2006、中留；2005、奥山ら；2006、山中ら；2011、児島；2012、横松；2015・2016・2017、鈴木ら；2016、朴；2017、上村；2017、中川；2017）や『幼稚園教育要領〈平成29年告示〉』、『初等教育資料』にて提示された事例や課題点を参考にし、園内研修に取り組んだ。その上で、Ａ園で収集した資料や園内研修で教職員が取り上げた課題から現状把握をし、①園の教育目標の明確化、②指導計画書の検討・改善、③保育・教育実践の記録の検討・改善を行った。その中で、幼稚園教育研

究会の運営（これまでの実施内容を資料として文末にまとめた）にも議論がおよび、特に10ヶ園以上が集まるA園が所属する幼稚園教育研究会においては、実践報告の様式がばらばらであるため、様式を同一にして取り組む主題の明確化をより一層図る必要があること、これまでの教職員の学びを整理する時間を設け、学びの定着に向けた取り組みが必要であるという意見もあった。

今回、全10回の園内研修の実践から、幼児期におけるカリキュラム・マネジメントを実施する際、何から着手するか、どの項目から進めるかに戸惑いがあるという担任教諭からの意見があったため、現時点において、カリキュラム・マネジメントの実施に向けて収集した資料や園長、担任教諭からの意見を集約し、これまでに、どのような事柄について確認したかを整理した。項目数は、11項目である。また、A園におけるPDCAサイクルの確立は、次年度以降の課題となる。今後も継続して実践研究を行い、幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの運営への考察を深めたい。

幼児期におけるカリキュラム・マネジメントを実施する際の確認項目および内容

項目	内容
園における子どもの実態、今ある教育課題の把握	・普段の保育・教育活動における子どもの姿を記録し、共有していたか ・育成したい子ども像と今ある子どもの課題点を把握し、共有していたか ・行政諸文書等も参考にし、子どもの育ちに関する諸課題の把握をしていたか
園の教育目標の明確化	・育成したい子ども像や子どもの姿をもとに、年間目標の設定（年齢別）をしていたか ・園の環境や地域の実態、学校評価等を参考にした園の教育目標を設定していたか
指導計画	・子どもの姿が反映された指導計画（日案・週案・期間案）を作成していたか ・園の教育目標（育成したい子ども像）に即した指導計画を作成していたか ・幼稚園教育要領等をふまえて作成していたか ・ねらいと内容が具体的であり、ねらいと内容が関連付けられて記述していたか ・子どもの姿と教師が設定したねらいに齟齬が生じていなかってたか ・子どもの多様な活動が引き出される環境構成の工夫を記述していたか ・学びにつながる経験とは何かをふまえた教師の援助を記述していたか ・行事の実施については、ねらい・内容、行事の意味と関連付けをし、記述していたか ・一度立てた指導計画を見直し、必要があれば柔軟に変更できていたか（日案・週案）
幼児の姿・教育実践の記録	・日々の記録を蓄積していたか →子どものつぶやきの記録、エピソード記録、個別記録の作成 ・客観的記録としての写真、映像を活用していたか ・第三者が読んでも子どもの実態が具体的でわかりやすく記述されていたか ・事実と解釈（実態と考察）に分けた記述がされていたか ・記録を振返り、翌日の日案や週案に活かしていたか ・クラスだよりや園だよりに記録を活用していたか ・家庭・地域連携、幼小連携、特別支援等へ記録を活用しているか
園内・園庭環境、地域環境の把握	・季節に応じた栽培植物、飼育小動物の把握、蔵書図書の把握等をしていたか ・園庭環境マップ等の作成をし、園内環境を把握していたか ・地域環境マップ等の作成をし、地域資源の把握をしていたか
保幼小連携	・保幼小連携の長期指導計画を作成していたか ・保幼小連携実施の指導案を作成していたか ・保幼小連携実施の記録を作成していたか ・次回の保幼小連携に記録を活用していたか ・小学校教育に関し、園の教職員が学びを深める機会があったか →小学校教諭との保幼小連携・教育内容の接続に関する合同研修会の実施等
特別支援	・特別支援を要する子どもの長期指導計画を作成していたか ・特別支援を要する子どもの日案・週案を作成していたか ・特別支援の子どもの様子を記録していたか ・翌日の日案・週案に記録を活かしていたか ・特別支援の教員に対する研修会の機会があったか
預かり保育	・預かり保育の長期指導計画を作成していたか ・預かり保育の日案・週案を作成していたか ・預かり保育実施後の記録を作成していたか ・記録を振り返り、翌日の預かり保育に活かしていたか

項目	内容
子育て支援	・子育て支援の実施計画があるか ・子育て支援実施後の記録を作成していたか ・次回の子育て支援に記録を活かしていたか
家庭・地域連携	・子どもの様子をクラスだよりや連絡帳を通して保護者に知らせ、信頼関係構築に取り組んでいたか ・ＰＴＡや地域住民による園運営への協力体制が構築されていたか
教職員研修の内容および実施後の情報共有	・定期的にミーティングや教職員会議を行い、子どもの実態等について話し合われていたか ・定期的に園内研修を実施していたか →園内研修のテーマ・内容が園の抱える課題を解決するものになっていたか →教師の資質・能力の向上に役立っていたか →研修講師と相談し、柔軟に実施内容を変更できたか ・各教員における園外研修での学びの共有をしていたか

（引用・参考文献）

上村晶（2017）「幼児教育・保育現場におけるカリキュラムデザインに関する一考察:保育のグランドデザインの編成プロセスにおける構造と現実的課題」桜花学園大学保育学部研究紀要15、pp.23－42

奥山順子・山名裕子（2006）「幼稚園教育における計画の位置づけ－保育者の意識調査にみる保育の計画性と保育者の専門性－」秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学61、pp.83－90

児島邦宏（2012）「カリキュラム・マネジメントと学校経営」安彦忠・児島邦宏・藤井千春・田中博之編著『よくわかる教育学原論』ミネルヴァ書房

鈴木智子・鈴木香奈恵（2016）「幼児教育・保育におけるカリキュラム・マネジメントの工夫と課題」 仁愛大学研究紀要人間生活学部篇（8）、pp.83－91

田村知子（2003）「カリキュラムマネジメントの理論に関する専攻研究の文献解題－F.W.Englishのカリキュラムマネジメント理論とM.SkilbekのSBCD理論より－」教育経営学研究紀要第6号、pp.95－103

―（2006）「カリキュラムマネジメントのモデル開発」日本教育工学論文誌29、pp.137－140

中川英貴（2017）『今、学校に求められるカリキュラム・マンジメント力　学校改善へのR－PDCA』櫂歌書房

中留武昭（2005）『カリキュラムマネジメントの定着過程－教育課程行政の裁量とかかわって』教育開発研究所

朴信永（2017）「協働によるよりよい幼児教育を目指したカリキュラム・マネジメントの実践について」 椙山女学園大学研究論集第48号、pp.141－149

文部科学省（2017）「幼稚園教育要領〈平成29年告示〉」フレーベル館

山中秀馬・横松友義（2011）「幼稚園における実効のある保育目標の明確化手順の開発－私立清和幼稚園でのアクション・リサーチー」教育実践学論集（12）、pp.135－144

横松友義（2015）「私立幼稚園における実効のある保育目標明確化手順の実用性・有効性向上の追求」 岡山大学大学院教育学研究科研究収録第158号、pp.43－51

―（2016）「私立幼稚園における実効のある保育目標に関する職員研修手順の開発」岡山大学大学院教育学研究科研究集録第162号、pp.59－69

―（2017）「各幼稚園でカリキュラム・マネジメントを 成立させるための研究者の協働の構想」 岡山大学大学院教育学研究科研究収録166、pp.41－51

（参考資料）

神津美津子（2017）「これからの幼稚園に求められるカリキュラム・マネジメント」初等教育資料７月号（No.955）、

pp.84－91
無藤隆（2017）「論説 幼稚園教育と小学校教育の接続の展望」初等教育資料６月号（No.954）、pp.108－115
文部科学省初等中等教育局幼児教育課（2017）「新幼稚園教育要領を基盤とした今後の幼児教育の展望（前半）」初等教育資料4月号（No.952）、pp.40－47

資料）Ａ幼稚園が所属する幼稚園教育研究会にて実施された研究協議会主題と内容

年度	研究協議主題			研究協議主題の捉え方・視点（以下、各園の設定事例）
1989 （Ｈ１）	幼稚園教育要領改訂（1989）：幼稚園教育の基本を明示、5領域の編成、ねらいと内容の関係を明確化、年間教育日数を最低39週とし、1日4時間を標準とする教育時間を地域の実情などに応じて弾力的に対応			
1992 （Ｈ４）	幼児理解 環境構成 教師の援助	幼稚園において、幼児が充実した生活を展開していくには、環境をどのように構成していけばよいか―環境と援助について		・幼児理解について（幼児の育ちを見るとは何か） ・一人一人を活かす教師の援助とは何か
1993 （Ｈ５）	幼児理解 環境構成 教師の援助 記録の取り方	幼児が主体的に生活していくための指導のあり方とは		・幼児にとっての充実した生活とは何か、 ・園環境を見直し、幼児が生き生きと遊べる環境を探り、どのような場所で、何をして誰と遊び、その遊びを深めているか記録から考える、一人一人の幼児の様子の把握、友達との関わり、環境としての教師のあり方について考える
1994 （Ｈ６）	幼児理解 環境構成 教師の援助	幼児の興味や欲求を、教師はどう捉え、どう受け止めるか		・幼児の心に共感を呼ぶような言葉掛けとは何か ・幼児の言葉は不完全であるため、イメージを誘うような教師の言葉掛けとは何か、話すこと、聞くことの実践を実施する ・いろいろな生活経験ができる環境構成の工夫を探る
1995 （Ｈ７）	領域「表現」 幼児理解 環境構成 教師の援助 記録の取り方	感じたり、考えたりしながら、幼児自身の表現する楽しさとはどのようなものか	…幼児のイメージが広がる過程を探る	・幼児の遊びの展開を記録し、考察する（パーマやさん遊び、砂場遊び、サッカー遊び、相撲ごっこ、カードづくり、等） ・遊びのイメージが育つ過程を探る
1996 （Ｈ８）	領域「健康」 幼児理解 環境構成 教師の援助	幼稚園において、幼児の興味や欲求に応じ、幼児とともに充実した生活をつくり出すためには、環境をどのように構成すればよいか	…自然な生活の流れの中で、先生や友達と触れ合いながら、生活に必要な習慣や態度を身に付けるようになるには、環境をどのように構成すればよいか	・いろいろな生活習慣の場面を捉えた実践から、環境構成、教師の援助のあり方を探る。（身辺処理、健康安全面、日常生活の基礎的技能、人間関係、等） ・幼児が家と幼稚園の生活習慣の違いがわかり、社会的　文化的行動様式（場に適応できるしなやかさ）を身に付ける工夫を探る ・年齢に応じた事例から考察する
1997 （Ｈ９）	領域「環境」 幼児理解 環境構成 教師の援助	直接的な体験の中で知的好奇心を育み、物の性質や数量などに対する感覚を豊かにしていくようになるには、環境をどのように構成すればよいか		・教師が教えるのではなく、幼児が多くの体験をする中で、何に驚きを感じ、不思議さに気付くのかについて　実践事例から探る ・幼児自身が試行錯誤しながら遊ぶ環境の工夫を探る
1998 （H10）	幼稚園教育要領改訂（1998）：教師の役割を明示、幼児期にふさわしい道徳性、自然体験・社会体験など具体的生活体験の重視、集団とのかかわりの中で幼児の自己実現を図る、小学校との連携、子育て支援、預かり保育			
	領域「人間関係」 家庭・地域連携 幼児理解 環境構成 教師の援助	幼稚園において幼児の興味や欲求に応じ、幼児とともに充実した生活をつくるために、環境構成をどうすればよいか	…あたたかな人間関係をはぐくみ、人とかかわる力を育成していくには環境をどのように構成すればよいか	・地域社会を基盤としたあたたかな人間関係を育むために、保護者に幼稚園を知ってもらうための取り組み、方策について考える ・保護者と幼稚園のつながりを深め、あたたかな人間関係を育める行事の在り方を見直す（保育参観、絵本の読み聞かせ、幼児とｼﾙﾊﾞｰｸﾗﾌﾞとの関わり）
1999 （H11）	異年齢児交流 家庭・地域連携 幼児理解 環境構成 教師の援助	幼児が感動体験を十分にもって、創造豊かな生活ができるように環境構成を幼児と共に創り上げる	…主体的に遊ぶ中で、色々なことを感じ、楽しく遊べるような環境構成。教師の役割と関わり方について	・一人一人に応じた環境をどのように構成するか ・幼児が豊かな生活体験を得るために、家庭・地域との関わりをどのように工夫するか ・異年齢児交流のための環境構成の工夫

年度	研究協議主題			研究協議主題の捉え方・視点（以下、各園の設定事例）
2000 （H12）	領域「言葉」 幼児理解 環境構成 教師の援助	幼稚園において、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成するためには、どのような工夫が必要か	…感じたことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、言葉で交わす喜びを味わうようになるには、環境をどのように構成すればよいか	・園生活の中で、幼児の心からわき出た言葉や表情を拾い、幼児の豊かな言葉や表現を育むには、どのような体験が必要か考え、その中での教師の役割としての環境構成や援助のあり方を探る ・幼児が体験したことや思い、感じた事、欲求や願いを素直に安心して話せる環境の工夫について考える ・人との関わりの中で、幼児はどのように伝え合う喜びを感じ取っていくのか、日々の姿から探る
2001 （H13）	領域「環境」 幼児理解 環境構成 教師の援助	幼児の主体的活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境構成するための工夫とは	…自然に触れて生活し、その大きさ美しさ不思議さなどに気付き、好奇心や探究心をもつようになるための環境構成とは	・季節の変化は見過ごしやすいため、園における自然環境（栽培植物、等）の時期を逃さないための計画を立てる ・自然に囲まれた環境が当たり前になっており、自然環境への気付きを育む教師の言葉掛け、環境構成の工夫を考える ・興味を持った植物、小動物への関心を高めるため、図鑑や絵本の設置以外の環境構成について考える
2002 （H14）	領域「環境」 幼児理解 環境構成 教師の援助	幼稚園において、教師が、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしていくためには、どのような関わりが必要か	…身近な物や遊具に興味をもち、考えたり、試したりして工夫して遊ぶようになるための教師の関わりとは	・教師の関わりによって、幼児の活動がどのように変化したかについて実践事例報告から考察する ・幼児の発達に応じた遊びの環境構成の工夫を探る ・遊びが発展する過程に応じた環境構成の工夫、教師の援助について考える
2003 （H15）	領域「健康」 領域「人間関係」 幼児理解 環境構成 教師の援助		…友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとするための教師の関わりとは	・集団生活を営む上で必要となるきまり（話を聞く時、物の共有、食事中、等）を再確認し、教師の援助について探る ・ルールのある遊びを取り入れ、その中における集団で遊ぶ面白さ、葛藤等について記録し、教師の援助について考える ・教師の援助により幼児の活動が豊かになった事例や決まりを作ったから上手くいった事例を取り上げる
2004 （H16）	領域「環境」 栽培活動 飼育活動 幼児理解 環境構成 教師の援助	幼稚園において、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、幼児の主体的な活動を確保するための物的・空間的環境をどのように構成していくか	…身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、労わったり大切にするようになるための物的・空間的環境構成とは	・栽培活動を通して培われた幼児の内面の変容を事例として取り上げ、考察する（かいわれ大根、二十日大根、にんじん、ふうせんかずら、等） ・飼育活動を通して培われた幼児の内面の変容を事例として取り上げ、考察する（かまきりの飼育、インコとの触れ合い、アゲハの幼虫の飼育）
2005 （H17）	領域「健康」 領域「環境」 幼児理解 環境構成 教師の援助		…色々な遊びの中で自ら体を動かし心地よさを味わうようになるための物的・空間的環境構成とは	・幼児が遊具や用具、素材とふさわしい関わりが持てるように、種類や材質等を考え、環境構成の工夫を探る ・各園による実践事例の報告から、幼児の実態をとらえた遊び環境のあり方について考える（ジャンケンゲーム、泥だんごづくり、巧技台遊び、ごっこ遊び、ドッチボール、リレー）
2006 （H18）	領域「人間関係」 幼児理解 環境構成 教師の援助	幼稚園において、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うためには、どのような工夫が必要か	…友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合い、一緒に物事をやり遂げようとする気持ちをもつための環境構成や教師の関わりとは	・教師が幼児の目で常に考えながら、幼児理解に努め、幼児の発達の見通しをもち、人とかかわる力を養うための環境構成について探る ・教師と幼児、幼児同士の心のつながりのある温かい集団を育てるための教師の関わりについて探る ・異年齢児交流の実践から得られた幼児の育ちを考える
2007 （H19）	領域「人間関係」 幼児理解 環境構成 教師の援助		…人の話を注意して聞き、相手に分かるように話すようになるために、どのような環境の構成や教師の関わりが必要か	・日頃の言語環境（絵本の読み聞かせ、話しやすい雰囲気）の見直しと教師の援助のあり方について探る ・家庭でも楽しく言葉のやり取りができるよう、家庭連携のあり方について考える ・幼児が心を動かし、表現したくなる感動体験ができるよう、環境構成や教師の関わり方の工夫を考える

<table>
<tr><th>年度</th><th colspan="3">研究協議主題</th><th>研究協議主題の捉え方・視点（以下、各園の設定事例）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">2008
（H20）</td><td colspan="4">幼稚園教育要領改訂（2008）：言葉による伝え合い、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続</td></tr>
<tr><td>領域「表現」
異年齢児交流
幼小連携
幼児理解
環境構成
教師の援助</td><td>幼稚園において、幼児の生活経験がそれぞれ異なること等を考慮し、一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うための工夫とは</td><td>…いろいろな体験を通じて、イメージを豊かにするためには、どのような環境の構成と教師の関わりが必要か</td><td>・幼児が言葉を交わす喜びを十分味わい、豊かな言語表現を支える教師の援助について考える
・異年齢のつながりや幼小連携を大切にし、交流をもちながら言葉を豊かにできる活動の工夫を考える
・幼児が「意味ある体験」を積めるために、幼児の経験と経験をつなげる教師の言葉掛けを考える</td></tr>
<tr><td>2009
（H21）</td><td>領域「人間関係」
協同遊び
幼児理解
環境構成
教師の援助</td><td colspan="2" rowspan="2">幼児が互いに関わりを深め、協同して遊ぶようになるためにはどのような環境の構成や教師の関わりが必要か</td><td>・一人一人の幼児の活動から、友達の良さや思いに気付き、協力・試行錯誤の経験を積み重ねられるような環境構成を探る
・教師も幼児と共に遊ぶ中で、幼児が自己発揮しながら、友達と多様な関わりがもてるように教師の援助を探る</td></tr>
<tr><td>2010
（H22）</td><td>領域「人間関係」
協同遊び
幼児理解
環境構成
教師の援助</td><td>・一人一人を大切にしながら、共に育つ、共に生きることとは何か、教師の援助や配慮について考える
・発達の過程に即して、幼児一人一人の自己発揮を見守り、友達と協力して遊ぶ経験を積み重ねていけるよう、環境構成や関わり方の工夫を探る</td></tr>
<tr><td>2011
（H23）</td><td>領域「健康」
幼児理解
環境構成
教師の援助</td><td colspan="2">健康な心と体を育て、幼児が進んで食べようとする気持ちをもつための環境の構成と教師の関わりについて</td><td>・落ち着いた環境を整え、食事の場面が和やかな雰囲気となるような工夫を考える
・各年齢に応じた食への興味関心を育てるため、野菜を育てる、調理する、味わうといった過程について考える
・体を十分動かして空腹を感じ、食べた時に満足感を心と体で味わえるよう、一日の生活の活動量や内容を考える</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2012
（H24）</td><td colspan="4">「子ども・子育て関連３法（子ども・子育て支援法、認定こども園法の一部改正法、子ども・子育て支援法及び認定こども園法の一部改正法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」成立</td></tr>
<tr><td>幼小接続
教育課程の編成
指導計画作成
幼児理解
環境構成
教師の援助</td><td colspan="2">幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続について</td><td>※共通主題を設定（各園による取り組みの報告）
・幼児と児童の交流や幼小の教職員の意見交換・合同研修等が継続的に行われ、接続を見通した教育課程が編成・実施されるようにするためには、連携・接続の体制づくりや教職員の資質向上などについて、どのような工夫や配慮が必要か
・幼小接続を体系的に理解し、幼児期と児童期の教育活動のつながりを見通して、豊かな学びを展開していくためには、教育課程の編成や指導計画の作成における工夫や配慮とは
・幼児期の終わりに、この時期にふさわしい「三つの自立」（学びの自立、生活上の自立、精神的な自立）を養うためには、幼小の接続期にどのような教育課程の編成や指導計画を作成していくことが必要か</td></tr>
<tr><td>2013
（H25）
2014
（H26）</td><td>幼小接続
幼児理解
環境構成
教師の援助</td><td colspan="2">自ら考えようとする気持ちが育つための環境の構成や教師の関わりについて</td><td>※共通主題を設定（各園による取り組みの報告）
・小学校以降の生活や学習の基盤の育成に繋がる幼稚園教育という観点から、幼児が自ら考えようとする姿をどう捉えるか
・他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにするためには、どのような環境の構成が必要か</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2015
（H27）
2016
（H28）</td><td colspan="4">「子ども・子育て支援新制度」施行</td></tr>
<tr><td>カリキュラム・マネジメント
幼児理解
環境構成
教師の援助</td><td colspan="2">幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実施、評価、改善のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について</td><td>※共通主題を設定（各園による取り組みの報告）
・幼児期の発達を踏まえた具体的なねらい及び内容の明確な設定の指導計画を作成するには、どのような工夫が必要か
・幼児の発達を長期的に見通した長期指導計画との関連を踏まえ、幼児の生活に即した具体的な短期指導計画を作成するためには、どのような工夫が必要か
・幼児理解を深めるための記録をもとに、指導の過程について反省や評価を適切に行い、新たな指導や評価の実際に生かすには、どのような工夫が必要か</td></tr>
<tr><td>2017
（H29）</td><td colspan="4">幼稚園教育要領改訂（2017）：幼稚園教育において育みたい資質・能力３つの柱及び幼児期の終わりまでに育って欲しい姿10項目の明示、幼小接続の推進、幼児理解に基づいた評価、言語活動の充実、特別支援への配慮</td></tr>
</table>